です。この時には、南北米オリンピックまで準備されています。小学生、中学生、高校生、大学生のスポーツ・フェスティバルが催されようとしています。人気のある選手たちが皆、エイズや、不倫の選手になっています。このような人々にみ言を伝えて、若者たちの方向性を正していかなければならないのです。

さらに、文先生は次のようなことを語られました。

「本来、我々がなすべきことは氏族メシヤです。氏族メシヤは宿命的使命であるにもかかわらず、今までその使命を果たしていません。ですから、今後、氏族メシヤは二世の祝福家庭を中心として成し、その代わり、一世はもう一度、世界に出て開拓をすべきである」

皆さんもご承知のとおり、牧会生活三十三年以上の人々が、清平で修練を受けています。これらの人々が全世界の第一線に出発します。それはなぜかといえば、神の国建設に向けて、多くの経験をした人々が対応しなければならないからです。

我々の今からの課題は、氏族メシヤの宿命的使命完遂と、超民族、超国家的に向けての神の国実現です。それが、今、着々と準備されているのです。

日本の皆さんの健闘を祈りつつ、簡単な報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

光言社文庫

ご注文は光言社受注センターへ
FAX(03)5478-1521
TEL(03)3460-0429

幸福へのパスポート

青春説法Ⅲ
宇宙と人生の原則

酒井正樹

■A6判 ■定価550円(税込)

愛と人生、世界をどのようにとらえていくべきかを、より本質的な立場で考える。真理究明のための手がかりを教えてくれる本。

特別寄稿　連載 第2回

原理から見た宗教統一

― 儒教と宗教統一(下) ―

韓国・統一思想研究院院長
李相軒(イサンホン)
(36家庭)

5　超自然的(霊的)存在

a　超自然的(霊的)存在に対する孔子の見解

儒教は、その伝統において実践指向性の宗教である。このような実践指向性は、知的探求を追求する西洋の思考方式とは違って、形而上学的な考慮がほとんどなく、具体的な倫理徳目を立てるのに重点をおいている。すなわち、孔子の教えは理論的倫理よりは実践的倫理に重点をおいている。

孔子自身も、平素、自分の教えの中で、超自然的、神秘的な存在は遠ざけると何度も主張した。その例を見よう。「先生が怪異、暴力、乱逆、鬼神について講釈されたことはなかった」(子不語、怪力乱神：『論語』述而篇　二十)。

子貢によると「先生の文化についてのお考えは伺うことはできたが、先生が人間の本性と天の道理についておっしゃることは、ついぞ伺うことができなかった」(夫子之文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也：『論語』公治張　十三)という。

孔子の弟子の中の一人である子路が、死者の霊を奉ることについて尋ねると、孔子は「生きている人間にじゅうぶんに仕えることすらできないで、どうして死者の霊魂にお仕えすることができようか」と語った。

子路が再び「では死とは何でしょうか」と尋ねると、孔子は「生についてまだよくわかっていないのに、どうして死のことがわかるものか」と答えられた。（季路問事鬼神、子曰、未能事人、焉能事鬼、曰、敢問死、曰未知生、焉知死：『論語』先進篇　十一）

また孔子は樊遅（はんち）に対して、「人民に対して、人としてなすべき義務を果たすように教え、祖先や神々に対して、十分に敬意をささげて離れた所にお祭りしておく。これが知というものだ」（子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣：『論語』雍也篇　二二）とも語った。

b　孔子の「超自然（霊的）存在」に対する問題点

孔子は、現実的なこと以外にはあまり語らなかった。特に、来世や霊に関することや、宗教的な話はほとんど持ち出さなかった。また非理性的な怪しいことや、非文化的な武力、社会秩序を破壊する乱暴な行為については述べなかった。では、このように霊魂や来世について触れなかった孔子の本当の意図は何だったのだろうか？　霊魂や来世がないから言わなかったのか、もしくは霊魂や来世について無知だったからなのか。

孔子は、「『聖』と『仁』という段になると、自分には思いも及ばない。しかし、それを学んでたゆまず、他人を教えて休まないということなら、大丈夫できるといってもよろしい」（子曰、若聖與仁則吾豈敢、抑為之不厭、誨人不倦、則可謂傳爾已矣：『論語』述而篇　三三）と告白していることから見て、孔子は「聖」と「仁」を理想として絶えず努力するかたではあったが、霊的存在である人間に対しては明らかにできる立場ではなかったことが分かる。

c　統一原理から見た「超自然的（霊的）存在」に対する見解

聖書には、「神は土と水と空気で人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」（創世記二・七）と記されている。

また、「肉の体でまかれ、霊の体によみがえるのである。肉の体があるのだから、霊の体もあるわけである」（コリントⅠ一五・四四）、「彼らは、天にある聖所のひな形と影とに仕えている者にすぎない」（ヘブル八・五）との記録もある。イエスの弟子であるペテロは、霊眼が開け、千百余年前に亡くなったモーセとエリヤがイエスと語り合っているのを見て、「ここに小屋を三つ建てましょう」（マタイ一七・四）と言ったという記録もある。

すなわち、これは来世である霊界が存在し、人間の霊魂はその霊界で生きていることを確認する内容である。統一原理は次のように言っている。完成した人間の姿を展開して造ったのが被造世界であるが、その世界は「無形実体世界」と「有形実体世界」から構成されている。

この「無形実体世界」（無形世界）と「有形実体世界」（有形世界）を合わせて「天宙」という。人間は霊魂と肉身から造られているが、この世界も霊界と肉界から構成されていることを明らかにしている。また、人間は地上で一生を生きてから、霊界へ行って永生するようになっている。

孔子が超自然的（霊的）存在の世界を言わなかったのは、彼が創造主の神が存在することはもちろん、創造の目的や創造過程を知ることができなかったからである。ゆえに孔子には、地上世界に対して主体の立場にある無形世界や、霊魂や来世についても語ることができないという限界点が見えるのである。

孔子が病にかかったとき、弟子の子路が心配して、天に祈りをささげることを願うと、孔子は「そんな例があるのか」と聞いた。それに対して子路は、「ございます。君主から死者に賜る追悼の辞に『汝（なんじ）のことを天地の神祇（しんぎ）に祈る』とあります」と答えた。

すると孔子は、「それなら、私はずっと以前から天地の神祇にお祈りしている。その必要はない」（子疾病、子路謂禱、子曰、有諸、子路對曰、有之、誄曰、禱爾于上下神祇、子曰、丘之禱之久矣：『論語』述而篇　三四）と答えた。

聖人と敬われる孔子が、天や神に対して無知であったとは考えにくいが、なぜ頼らなかったのだろうか？　それは神の存在や、神の性稟（せいひん）についての確信がなかったからであると見てよいだろう。

6　善と悪

a 善に対する儒教の見解

① 儒教でいう善

『論語』において、孔子が善の概念を規定した内容は見つからないが、善とかかわりのある部分を見ると、「先進二〇」において、弟子の子張が善人の生き方はいかなるものかと孔子に問うている。それに対して孔子は「古人の歩んだ道の跡を追って修行しなければならない。そうでないと堂にのぼるだけで、室にはいり、奥義に達することはできない」（子張問善人之道、子曰、不踐迹、亦不入於室：『論語』先進篇　二〇）と答えた。

孟子

また孔子は、『中庸』では「顔回とはいかなる人物か。まず何よりも、中庸を選択する能力のある人物であった。すなわち、一善をうやうやしくていねいに扱って、よく守り、之を失わず、無くさないようにした」（子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善則拳拳服膺、而弗失之矣：『中庸』第八章）と善を語っている。

斉の国の人、浩生不害が孟子に「先生、樂正子はどんな人物でございますか」と問うと、孟子は「彼は善人であり、また信人である」と答えた。また「なにを善といい、なにを信というのでしょうか」と問うと、「かくありたいと行うことが善である」（浩生不害問曰、樂正子何人也、孟子曰、善人也、信人也、何謂善、何謂信、曰、可欲之謂善：『孟子』尽心章句下　二五）と答えた。

人間の「かくありたいと行うこと」には、善も悪も可能である。望ましい方向から「行うこと」が善の真意だといえるが、その概念が明確でないところに問題がある。

② 儒教でいう「善」の問題点

孔子は『論語』、『中庸』、『大学』のすべてにわたって

「仁」の実践を力説したが、善が何かに関してははっきり言わなかった。孟子は可欲という言葉で表現したが、やはり明確な概念ではなかった。

四書の『大学』の三綱領の中の第三綱領である「止於至善」も倫理的側面から最高価値を社会的に実現しようとしたが、善の概念が不明確なのに善の実現が可能だろうかという疑いは隠せない。ここで儒教が指向する理想の中の一つである善の概念も、その実現という面からみるとき、限界があるということが分かる。

③ 統一原理から見た儒教の「善」

善とは何か？　善とは元来、判断や行為の際の心理上の価値観のことを意味する。「善い」という言葉は、行為の主体が行為の対象である何かを見て、いかなる状態であるかの判断を表現する倫理的な用語である。

したがって、「善」は一種の規定性である。いわゆる善の政治、善の社会、善の世界等の空間上の規定性、善の歴史、善の時代、善の統治期間等の時間上の規定性がそうである。したがって、文化の発達とともに、善の概念も広く深くなって多様化されたのである。

ところが、統一原理では善を「主体と対象が愛と美を良く授け、良く受けて合性一体化して神の第三対象となり、四位基台を造成して、神の創造目的を成就する行為とか、その行為の結果（『原理講論』七三ページ）」と定義している。したがって、善とは創造主の神を前提にした言葉であり、神の創造目的と離れることのできない関係にある。

すなわち、善の主体であられる神が、善の実体対象として人間を造られたのである。人間が時空を超越し、善を指向する良心を持っているのは、人間がこのような創造理想をもとにして造られた被造物であるからである。

b 「悪」に対する儒教の見解

① 儒教でいう「悪」

善と同じく、悪に対しても儒教では具体的に定義したところがない。孔子の弟子である樊遲が舞雩（雨ごいの舞台）を散歩しながら、「恐れ入りますが、『得を崇くし慝を脩め惑いを弁ずる』という古語の意味をお教えください

ませんか」と聞いた。

すると孔子は、「いい質問だね。まず仕事に努力し、利益をとるのはあと回しにする、それが崇徳つまり徳を充実させることにならないかな。自分の悪いことを責めて、他人の悪いことを責めない……」（樊遲從遊於舞雩之下、曰、敢問崇德脩慝弁惑、子曰、善哉問、先事後得、非崇德與、攻其惡無功人之悪、非脩慝與、……：『論語』顔淵篇　二一）」と語っている。

荀子（じゅんし）は性悪説を主張したが、その根拠は次のようである。

「人間には、生まれつき利益によって左右される一面がある。この一面がそのまま成長してゆくと、人に譲る気持ちがなくなって、争いごとが起こる。また、生まれつき相手を憎む一面がある。この一面がそのまま成長してゆくと、誠意が失われて、相手を裏切るようになる。

また、生まれつき目とか耳とかの感覚的充足を求める一面がある。この一面がそのまま成長してゆくと、礼とか義とかの社会規範が失われて、よからぬことをするようになる。

このように、天性や感情のままに行動すれば、必ず争いごとが起こり、秩序も道徳も破壊されて、社会が混乱してしまう。そこでどうしても、指導者と法とによる指導が必要であり、礼・義による教化が必要である。そうすれば自己抑制がはたらき、秩序や道徳が守られるから、社会が安定するのである。この点からしても、人間の天性が悪であることは明らかだ。善なる性質は人為の所産にすぎない」（荀子：性悪篇）

②儒教でいう「悪」の問題点

先に述べたように、孟子や荀子（じゅんし）は悪に対して触れてはいるが、悪とは何か、悪の正体は何か、また悪の起源は何か、ということをはっきりさせなかった。

「悪」の正体を知らずにいくら「仁」を施しても、「仁」の世界にはなれないし、善なる人間つまり君子にはなれない。荀子によると、人間の天性にはさまざまな情欲があり、これに従って行動すると必ず悪なることが起こるから、人間の性は元来悪であると考えざるを得ないと言った。

つまり、人間の性は本来、悪なるものなので、必ず礼儀法度がなければならないし、その礼儀法度により人間の惰性を正しく導いてこそ善になると主張したが、はたしてそうであろうか？

③統一原理から見た儒教の「悪」

悪の主管圏内に落ちた人間が、悪から解放されるためには、悪を清算しなければならない。悪は邪心に由来する。したがって、悪を清算するためには、人間の心に存在しながら、人間に悪の行為をなさしめる邪心をなくさなければならない。邪心とはいかなるもので、邪心が生ずるようになった動機は何か、という根本問題を解決しなければならない。そうしなければ、悪と邪心から解放できないのである。

したがって、孔子の重要な教えの中の一つである「仁」をいくら実行するといっても、人間の内部に流れている邪心とその邪心を支配している「悪」の根源の正体を明らかにできなければ、「仁」のための人間の苦労が、砂上の楼閣に過ぎなくなる。

統一原理では、このような悪の問題点をはっきり明らかにしている。善の主体であられる神が善の理想を成すため、その実体対象として人間を造られ、「生めよ、ふえよ、地に満ちて、万物を主管せよ（創世記一・二八）」と祝福された。

祝福を完成したその世界は、神を中心とした世界であり、悪を見ることのできない天国の世界である。その世界は、まず地上において成就されるが、そのような世界が地上天国である。地上で神に喜びと栄光を帰した人間が、死後も霊界でこのような暮らしを永遠に続けると、そこが天上天国となる。

人間により、先に成就されることになっていた世界が地上天国であったが、人間始祖が蛇に比喩される天使長の誘惑によって、善悪の実を取って食べて、罪を犯し、堕落してしまったために、そのような世界を成就することができなかった。堕落した天使長は、サタンになって霊的に人間をずっと支配しているので、人間が罪悪から免れるためには、人間を悪の方向へ引っ張っていく、そのサタンの正体を明確にして、天の前に讒訴（ざんそ）し、その主管圏から免れなければならない。

㈡　統一原理から見た儒教

(1) 儒教出現の意義

以上、述べたことが儒教の核心の主張である。では、儒教が出現するようになった摂理的意義はどこにあるのか。

人間始祖のアダムとエバの堕落によって、人間は霊的無知に陥って天と関係のない位置へ転落した。しかし、善の理想を成すための実体対象として造られた人間は、たとえ悪の主管圏内で生きていても、人間には善を指向する創造本性が残っているために、良心は時空を超越して善の主体を探してきた。このような内的良心の要求によって生まれたのが宗教である。東洋の精神世界を支配してきた儒教もその中の一つである。

統一思想の「歴史論」では、創造の法則の一つに「六数期間の法則」があるが、これは、神の創造が人間始祖であるアダム創造の六数期間前から始まったところに由来する法則である。人間始祖のアダムが善の先祖になれなかったので、神は後のアダムであるイエスを地上に送り、救援摂理をなそうとされた。

すなわち、イエス誕生の六数前である紀元前六百余年から、天はイエスが来られるとき、伝道しやすくするために、つまり、人々の心が真理に関心を持つようにするために、洋の東西に聖賢たちを送られた。このようにして、東西に聖賢たちが一時に数多く出現した紀元前五、六世紀前後の時代を、ヤスパースは「枢軸時代」と表現した。孔子もやはり、このような時代状況のもとで誕生し、儒教の教えを広げるようになったのである。

(2) 原理から見た儒教

次は、原理の立場から儒教の出現の摂理的意義を述べてみる。儒教の創始者は、必ずしも孔子一人だけではないが、今日では、一般的に孔子を初萌儒者の代表と見ている。ところで孔子の出現は、釈迦と同じく紀元前六世紀であって、やはり六数期間の摂理法則によって、第二アダムであるイエス出現の六数期間前に中国の地に現れたのである。

仏教の内容が、当時のインドの社会的現実の反映であったように、天の思想、雑神思想の背景の中で、当時の群雄割拠、諸子百家の出現などの社会的現象を土台にして、孔子の教えが成立したのである。すなわち、儒教も六数期間の法則により、中国大陸の民をメシヤ出現に対備させるために、神が立てられた宗教であったのである。

(3) 終末の宗教統一と儒教

神は人間救援のみ旨を成すために、復帰摂理を始められた。まず摂理の達成のために、摂理の中心宗教と中心民族と中心国家を立てられた。中心宗教は、旧約時代はユダヤ教、新約時代はキリスト教、中心民族は旧約時代はイスラエル民族、新約時代はキリスト教徒である。このように中心民族と中心宗教を立てられたのは、人間の心に存在し、心を惑わしてきたサタンの勢力を分立するためであった。

一方、神は中心宗教（キリスト教）以外にも周辺宗教として、儒教、仏教、イスラム教など、さまざまな宗教を立てて、その教えを通して多くの民族を教化しながら、人類の精神を導いてこられた。これは、創造目的を達成しようとされる摂理の完成のためだけではなく、全人類を地域、民族、言語、文化を超えて、一つの文化圏で結ぶためであった。この運動は今日も続いている。

ところが今日に至って、この運動は一つの中心によって主導的に推進されているが、その中心になられるかたは、今日、統一原理と統一思想により統一運動を率いておられる文鮮明先生である。したがって、神の摂理から見ると、歴史の最後の段階において、統一原理と統一思想によって、すべての宗教が一つに統一されるほかにないのである。儒教もその例外ではない。

三　結論

神の摂理から見ると、長らく東洋の精神文化を導いてきた儒教は、悠久なる歴史を通じて、周辺摂理の宗教的役割をなしてきた。特に「修己治人」の倫理的教訓を先立てて、人間の心性を善化させるのに努力してきたのである。

今、摂理史の最後に至り、人類の真の父母が出現されたことにより、儒教の使命と役割も終わるのである。神様が儒教を存続させてこられた目的が、人類の真の父母の出現によって達成できたからである。

したがって、今まで積んできた儒教のあらゆる業績は（他宗教の業績も）、再臨のメシヤ、つまり真の父母に相続されて、儒教が主張してきた「大同世界」、すなわち理想世界がいよいよ実現されるようになるのである。（つづく）